

華岡青洲の醫學思想

はじめに

華岡青洲（寶曆一〇年、一七六〇年～天保六年、一八三五年）は、文化二年（一八〇五年）一〇月二三日、人類の醫學史上、初めて全身麻醉薬を用いた乳癌摘出手術に成功した醫師として、廣く世に知られている。その醫學史上における貢獻は、その傑出した乳癌摘出手術法の開發のみに止まらない。紀州那賀郡上名手村大字西山村字平山（現、和歌山縣紀の川市）に開かれた華岡一門の診療處たる「春林軒」は、治療室・講義室・調劑室・入院用宿室・看護婦室・往診用厩舎などを具える病院兼醫學校であり、醫學史上、江戸時代後期の醫療と醫學研究の先進的機關として、重要な地位を占めた。

『乳岩姓名録』（高橋コレクション¹）によれば、享和四年（一八〇四年）一月より明治二年（一八六九年）五月に至るまで、華岡氏の春林軒で乳癌の摘出手術を受けた患者は延べ一七七人にのぼる。春林軒は近在の疾病患者の治療に當たったほか、北は東北から南は九州に至る各地から、華岡流醫學の名聲を聞きつけ治療を求め馳せ参じた乳癌患者に對して、その得意とする外科的治療を施したのである。

松村 巧

また、『華岡青洲先生春林軒門人録』²によれば、天明八年（一七八八年）入門の中川脩亭を筆頭に、安政二年（一八五五年）に至るまで、北は陸奥・出羽から西は薩摩・對馬に至るまで、凡そ六八箇國、合計千五百八名³の醫學生が華岡一門に入り、その醫術を學んだ。このように、華岡青洲一門は、その醫療活動においても、また醫術講學においても、近世醫學史上、特筆すべき役割を果たした。そして、その骨幹をなすものは、青洲その人の醫療學說と醫療技術であったことは、言をまたない。

傳記の確認と問題の所在

華岡青洲の傳記資料のうち、最も信頼に足る資料は、和歌山縣紀の川市西野山四七三番地に在る華岡家墓地の參道に建てられた「華岡青洲墓誌銘」である。⁴この墓誌銘は、青洲と交友をもった紀州藩の儒者、仁井田好古（一七七〇～一八四八年）が、華岡青洲の次男・修平氏、ならびに娘養子の準平氏の懇請を受けて、青洲の逝去二箇月後の天保六年（一八三五年）冬十二月に撰述し書寫したものである。仁井田好古は、紀州の古義學を代表する儒者であり、主著に、『論語』の古注

を集めた『論語古傳』がある。墓誌銘は、一部分剥落して読み難い字があり、かつ既に活字化されたものには誤讀が含まれている。明治十九年（一八八六年）に石碑建立に際し、西山亨氏が書寫した稿本が高橋コレクションの中に存するので、碑文そのものと校合したものを、句點を施して、全文掲げる。

華岡青洲墓誌銘

君諱震、字伯行、稱隨賢、別號青洲。橘姓、和田氏。其先和田五郎政之、家于河内郡華岡、因氏焉。六世祖傳之丞、事阜山高政。高政亡、來於本藩、那賀郡麻生津莊赤沼田、處焉。其子傳左衛門、慶長中移于名手莊。高祖、諱尚親、又移于西野山邨平山。至于王父靈仙翁、始以醫爲業。考諱尚道、妣松本氏、有男女五人。君、其長子也。幼而穎敏、氣宇英邁。家承祖業、研精醫術。僻邑之師友、乃遊京師、友桃谷華洲、山田靜齋諸子。又從吉益南涯翁、講氣血水。又師大和見水翁、學外治。其他所從遊、無常師。磨淬數年、殆廢寢食。既而悟曰、世醫所論、局于舊方、泥于經語、不能活用之。又分科爲內外、不知合一之理。是安足起痼救沈也哉。乃翻然去、歸其鄉。遂唱內外合一、活物窮理之說。曰、凡療疾、其處方制劑、不必拘局方。藥餌所不及、可以針灸治之。針灸所不及、可以剝腹背、可以湔腸胃。苟可以活人、何所不爲。今言蘭者、密於理而略於法。奉漢者、精於法、泥於跡。豈足共論治哉。於是折中於諸家、而活用之。本古而弗拘其跡、出新而弗失其軌。奇疾異病、萬書所不載、無不隨手奏效者。鄉隣聞者、始而驚且排、終而皆欣欣口譽、稱爲華陀復出焉。名聲大著海內。繫於沈痾疴篤疾、衆醫不能療焉者、皆輿而集于門。里閭爲是填塞。凡六十六州、無

國不來。又醫生入塾受業、凡千百三十餘人、以國數之、其不至者止大隈壹岐二國耳。其治、好用家方麻沸散、號曰、通仙散。度其強弱虛實、沸湯服之。既而截斷、湔洗刮穢、除疾乃已。其療乳岩最多。前後愈者、數百人。其他出奇起沈、不知幾千人矣。所著瘍科瑣言、產科瑣言、瘍科神書、疔瘡辨明、乳岩辨、天刑祕錄、傷寒講義等、二十七種。皆言其治術之大意。常語門人曰、吾術得于心而應于手、口不能言、筆不能書。能視者在領會之耳。又曰、餘精數內治、世以外科稱之、故所繼未盡。不亦遺憾乎。平素好施、務恤貧困。隣里由此舉火者、數十家。雅性真率、不脩邊幅、亦不求聞達、故不就官。文政己卯之歲、辟列于醫員、賜俸米若干、特許邑居。後又命、準于待醫、加俸若干。天保乙未、十月二日、病而卒于家。春秋七十六歲。葬於邨中地藏寺、先塋之次。娶妹背氏、生二男二女。長曰、雲平、先而卒。次曰、修平、繼其業。又養與義致男、以長女妻之、曰、準平、亦業醫。次女適于川端稠宜。門人與二平、謀曰、先生以醫鳴於海內、功績在世。豈可無銘。來而屬辭於餘。餘與君有故、故義不得辭。爲書其治術之概略、繫之以銘。軒岐之術、泥經局方、因循錮弊、習而爲常。偉歎維君、洗剔一新、救沈起死。海內稱神、法傳後世、遺澤在人。貞珉勒詞、千載曷泯。天保六年、歲在乙未、冬十二月。仁井田好古 撰並書。

この銘文は、仁井田好古の手に成るものだけあって、簡にして要を得、青洲の醫術の核心を道破している。そのことを論ずる前に、墓誌に沿い、かつ他の傳記資料および先行研究の成果によって補いつつ、その事跡の要點を確認しておきたい。

華岡青洲、諱は震、字は伯行、隨賢と稱し、別に青洲と號す。一族は、六世の祖、華岡傳之丞の代に、河内郡から紀州に移り住み、曾祖父^①、尙親の時、後の「春林軒」の所在地である西野山邨平山に居を移した。祖父の華岡靈仙（諱は尙政、？～一七六八年）が、初めて醫を業とし、父の華岡雲仙、（諱は尙道。一に、直道と稱す。一七二二年～一七八五年）も父業を繼いで、醫を業とした。吳秀三氏の考證によれば、父・華岡雲仙は、かつて大阪に出て、岩永蕃玄（名は正徳。吳秀三氏は、長崎出身の南蠻流外科醫の岩永磐玄の子弟かと推定。）に師事し、瘍科を業とし、兼ねて内科にも通じた。瘍科は、言うまでもなく、外科の一分科であり、青洲が後に繼承することになる父業が外科醫であったことは、青洲の醫術の基底として重要である。

後、青洲は、二十三歳の時（一七八二年）、初めて京都に遊學し、桃谷華洲（一七二一年～一七八二年）・山田靜齋（？～一七九三年）らと交わり、さらに、吉益南涯（一七五〇年～一八一三年）、および大和見水に師事した、という。うち、吉益南涯は、古醫方の大家・吉益東洞（一七〇二年～一七七三年）の子である。墓誌は、青洲は吉益南涯から「氣血水」の説を學んだと言う。筆者が見るかぎり、青洲が南涯から學んだ醫學説のうち、最も大きな影響を受けたのは、吉益東洞の持論であった「萬病一毒之説」であったと思われる（後述）。ともあれ、青洲は、東洞・南涯父子の學統を繼承することにより、古醫方の内科的見識を培った。この點は、青洲の醫術の理論的基礎を成すものであり、後に詳論する。青洲は、京都遊學中、いま一人の醫師に師事して「外治」（外科學）を學んだ。その師の名を、墓誌は、「大和見水」と記している。「華岡先生略傳」・「皇國名醫傳」の記述も同様である。しかし、吳秀三氏は、大和家系譜ならびに大和見水を葬る

京都・黒谷榮攝院の過去帳を根據にして、大和見水は青洲の京都遊學の二年前（安永九年＝一七八〇年）に死亡していることを發見し、青洲が師事したのは、大和見水ではなく、その業を繼いだ養子の大和見立であろうと推測している^②。大和見水は、かつて、蘭學流外科醫の醫師・伊良子道牛（二六七年～一七三四年）に師事して外科學を學び、泉州・岸和田藩の侍醫となった人である。青洲が師事したのが見水その人であったにせよ、その繼承者の見立であったにせよ、大和家流醫術を介して蘭學流外科學に接し得たのは、彼の外科學の發展にとって極めて重要である。なぜなら、後、青洲が紀州に歸り春林軒で行った外科手術において用いた手術器具ならびに手術法は、蘭學流外科學のそれ、或はそれに改良を加えたものであったからである^③。このように、青洲は京都遊學の中で、内科學と外科學の基礎を培ったと思われるが、それにも益して重要なものは、青洲が京都滞在中に接し得た當時の多くの醫術に満足し得ず、従前の醫術の限界を感得したということである。墓誌は、青洲の語として、次のように言っている、

「世醫の論ずる所は、舊方に局し、經語に泥し、これを活用すること能はず。また、科を分ちて内外と爲し、合一の理を知らず。これ、いづくんぞ痼を起こし沈を救うに足らんや。」

このように、青洲は、従前の醫學が舊來の處方や傳統的な醫書の概念に拘泥するばかりで、活きた人體の生理・病理に對處しえないといふこと、また、従前の醫學が門を内科と外科に分ち門を専らにするのみで、患者の必要とする臨機應變の治療を施し得ないでいること、この二點を自らの認識として悟得したのである。前者の認識は「活物窮理」の説、また、後者の認識は「内外合一」の説となり、紀州歸郷後の青洲一門の旗幟となっていた。「皇國名醫傳」華岡隨賢傳も、

「既歸、痢内外合一・活物窮理之說。曰、方無古今、内外一理。泥古不可以通于今、略内不可以治於外」と記している。この、「内外合一」および「活物窮理」の說こそ、華岡一門の醫學の綱領的な口號となつた說であり、乳癌摘出手術など華岡流醫學の斬新な治療を拓り開く原動力となつたと思われる（後述）。

さて、天明五年（一七八五年）、三年間の京都遊學を終え、紀州那賀郡に歸郷した青洲は、春林軒に據り、終生、近在の患者、および名を聞いて諸國から集まつた患者に對する治療と、そして、やはり諸國から集まつた醫生に對する講學とに終始した。その治療活動は、外科・内科に涉り、さらに産科・整骨科等に及んだ。とりわけ麻酔藥「通仙散」を用いた癌摘出手術等の外科的手術を得意とした¹⁵⁾。後、青洲は、紀州藩により、文政二年（一八一九年）に醫員に列せられ、また、天保四年（一八三三年）には侍醫に準ずる「奥醫資格」の待遇を賜つた。しかし、榮達を望まず、春林軒における治療活動と講學を事として、天保六年（一八三五年）、生涯を終えた。

以上、青洲の傳記の要點を確認した。青洲は京都遊學の中で吉益南涯から古醫方の醫學說を、大和見水あるいは大和見立から蘭學流外科學を學び、自らの醫學の基礎を築いた。それとともに京都遊學を契機にして、従前の醫學の限界を悟り、新たに「内外合一」・「活物窮理」の說を確立した。紀州歸國後の青洲の斬新な醫療活動が、これら「内外合一」・「活物窮理」等の口號で表される青洲の醫學思想と如何なる關りを有しているのか、それが本小論の課題である。

華岡青洲の著述資料

華岡青洲の著書については、門人・佐藤持敬が「華岡氏遺書目錄」

華岡青洲の醫學思想

を作り、吳秀三氏はそれを増補して、その著『華岡青洲先生及其外科第三卷「青洲先生ノ著述」に收録した。佐藤持敬の目錄原本は四八種を著録し、吳秀三氏は二四種を増補している。うち、『外科神書』・『瘍科瑣言』・『燈下醫斷』・『青洲先生治驗錄』・『産科瑣言』の五種が、『近世漢方醫學書集成』第二九卷に、また『青囊祕錄』・『春林軒丸散方』・『春林軒膏方』・『貼膏攷』・『瘍科方筌』・『春林軒撮要方筌』の六種が、『近世漢方醫學書集成』第三〇卷に、それぞれ收録されて影印出版されている。ただし、吳秀三氏増補の「華岡氏遺書目錄」に著録されている著述以外にも、『青洲先生醫譚』・『青洲先生金瘡要術』・『外科起癢』・『青洲先生卷木綿、并整骨圖』等々、青洲の著述に歸せられる多數の書籍が高橋コレクションには存在し、その全容はいまだつかめていないというのが實情である。

しかし、嚴密に言えば、逆に、全き意味で青洲自著であると確言できる書物は皆無と言つてもよい。現存する「青洲の著書」とされる書物は、すべて門人による筆録もしくは筆寫によるものであり、刻本は全く存在しない。しかも同名の書物についても、複数の抄本が存在し、その間に構成や字句について多くの異同が存在する。青洲の自著の可能性が最も高い『乳巖治驗錄』（天理大學附屬圖書館藏）でさえ、錯簡と多くの誤字・脱字を含んでおり、少なくとも青洲の自筆の抄本ではない¹⁶⁾。これは、現存する「青洲の著書」とされる書物が、春林軒に集つた門下生たちにより、抄寫され、轉寫されて、今に傳存していることに歸因する。加えて、これらの書籍は、主として、具體的な疾病に對する治術・治驗、また藥物の處方などの記録であり、新たな知見は新たな記録の増補を生じる。青洲の著述とされる資料が錯綜している所以である。したがって、華岡青洲の研究は、「青洲の著書」とし

て傳存する資料の異本を蒐集し、それらを對校する作業が、まず爲されなければならない。⁽¹⁶⁾

華岡青洲研究史

華岡青洲とその醫學に關しては、從來より少なからぬ論著が公刊されており、從來の研究の展開の経緯は、松木明知氏の「華岡青洲研究史」(『日本醫史學雜誌』第五一卷第三號所收、二〇〇五年九月、日本醫史學會)に詳しい。⁽¹⁷⁾ それらを大別すれば、傳記考證、書誌考證、江戸期學術史の觀點からの研究、外科學史的研究、麻醉學史的研究、とりわけ乳癌治療の觀點からの研究、および資料譯注研究などに分けられる。そして、それらの研究は、主として醫學史研究者や外科學・麻醉學の醫學研究者、および當地の顯彰團體に屬する人士よって進められてきた。おかげで、華岡青洲の生涯とその醫學上における功績についての概略は、あらかじめ究明されたといえる。とりわけ吳秀三氏の大著、『華岡青洲先生及其外科學』は、傳記研究・外科學的研究・著述の書誌的研究、および青洲の春林軒の治病と講學の醫學史的研究等、廣汎な内容に涉り、細部については後人の研究により補正された點は有るものの、青洲研究の基礎を築いた研究であり、現在でもなおその水準を超える研究は見出し難い。

けれども、從來の研究が、主として醫學および醫學史の專家によって擔われたがゆえに、總じて言えば、文獻學的研究ならびに醫學思想史的研究の方面では、いまだ究明されていない問題があまりにも多い。とりわけ、華岡流醫學を今に伝える資料のテキスト研究は、『乳巖治療錄』を除けば、ほとんど緒にすら就いていない。また、思想史もしくは醫學思想史の觀點からの研究は全くないと言っても過言ではない。

私自身その基礎的作業の緒に就いたばかりであるが、その寥寥たる識見に基づいて、華岡青洲の醫學思想を窺見してみたい。ただし、既述したように、現存する青洲の著述とされる資料のほぼ全てが具體的な疾病の解説・治術・治驗や藥物の處方に關する記録であり、思想や醫學原論を正面から述べた資料は極めて少ない。それゆえ、本小論の思想史的研究は、青洲の思想の細部を詳述するより、むしろ青洲の綱領的な觀點が如何なる思想潮流を汲んでいるのかという問題の究明を主とせざるを得ない。

華岡青洲の醫學思想

其の一 「内外合一」の說

さて、華岡青洲は、前述のごとく、京都遊學を契機として、舊來の醫術に限界を感じ、「世醫所論、局于舊方、泥于經語、不能活用之。又分科爲内外、不知合一之理。是安足起痼救沈也哉。」と悟ったと、墓誌は記していた。また、『皇國名醫傳』は、「既歸、朔内外合一・活物窮理之說、曰、方無古今、内外一理。泥古不可以通于今、略内不可以於外。」と記している。青洲は、知人から所望されて揮毫する場合、好んでこの言葉を書いたと思われ、青洲記念館たる「青洲の里」(和歌山縣紀の川市)には、「欲療疾病、當精其内外、方無古今、唯在致其知。華震書」と揮毫した青洲自筆の四行書が傳存する。これらのことから、「内外合一」あるいは「内外一理」という語が青洲一門の綱領的な口號であったことが知れる。

ところで、墓誌の文脈からは、「内外合一」とは、内科學と外科學

の雙方に精通し、その雙方の識見を統合することであると解釋するのが自然であり、また從來そのように理解されてきた。

けれども、上に引いた文章に見えるがごとく、「内外合一」の基底には「内外一理」、すなわち内科が対象とする體内の生理・病理と外科が対象とする人體の外表の生理・病理とが、「一理」によって貫通されているという觀點が存在している。つまり「内外一理」こそが基底をなす認識であり、内外兼脩ということは、この認識から導きだされた要請に過ぎない。

ところで、醫學を離れて思想一般の廣がりて考えるならば、そもそも、「内外合一」あるいは「内外一理」という命題は、振り返れば、程顥（一〇三三～一〇八五年）・程頤（一〇三三～一一〇七年）から朱熹（一一三〇～一二〇〇年）に至る宋代の理學の成立の過程において、盛んに用いられた論理であった。たとえば、程頤は「格物窮理」を論ずるなかで、次のように言っている、

「問、觀物察己、還因見物、反求諸身、否。曰、不必如此說。物我一理、纔明彼即曉此、合内外之道也」〔河南程氏遺書〕卷一八「伊川先生語・其四」²⁰

「又問、義只在事上、如何。曰、内外一理、豈特事上求合義也。」〔河南程氏遺書〕卷一八「伊川先生語・其四」²¹

この用例において、程頤は、格物窮理を論じつつ、外なる事物と内なる自己とは、「一理」によって貫かれていたのであるから、「物」と「我」とに分けて「理」を窮めるには及ばないと述べ、それを「内外を合するの道」と呼稱している。

さらに、朱熹は「格物窮理」を論じて、次のように言っている、「蓋天人一物、内外一理、流通貫徹、初無間隔。若不見得、則雖生於

天地間、而不知所以爲天地之理、雖有人之形貌、而亦不知所以爲人之理矣。」〔朱文公文集〕卷三八「答袁機仲別幅」²²

「蓋有、以必窮萬物之理同出於一、爲格物、知萬物同出乎一理、爲知至、如合内外之道、則天人物我爲一……者、似矣。然其欲必窮萬物之理、而專指外物、則於理之在己者、有不明矣。……」〔大學或問〕卷一²³

このように、朱熹にあっては、天地の間の萬物と人間の己の内とは、「一理」の貫通のゆえに、本来「一」なるものであるとされる。要するに、宋代の理學にあっては、外なる萬物と人間の己の内とは、「一理」の貫通のゆえに、本質的に「一」なるものであり、その「理」を窮める場合、「理」を内在的と外在的に區別して捉えるのではなく、内外を合一して觀ずることが必要であるとされるのである。

儒學と醫學と分野は異なり、「内外」の語の含意するところは異なるが、華岡青洲のいわゆる「内外合一」・「内外一理」の口號は、明らかに宋代の理學に由來するものであり、青洲はいわゆる朱子學から、「一理」の一貫という觀點あるいは發想を繼承していると言うことができよう。青洲においては、「内外」とは内科と外科、もしくはそれらが対象とする人體の内部と外表の生理や病理なのであるが、それらを「一理」として一貫して認識すべきであるとすると青洲の主張には、彼の教養の基底にある朱子學の「理」の普遍性と一貫性の思想が形を變えて活かしているとみなすことができよう。

この青洲の思想を醫書について検討してみる。たとえば、青洲は、『燈下醫談』後篇において、外科學における瘍瘡の治療を論ずる中で、次のように言っている、（括弧内は、筆者が補ったもの。後の引用もこれに倣う。）

「凡ソ外科ヲ爲（サ）ント欲（セ）バ、先（ニ）内科ヲ精（シク）スベシ。然ラザレバ、治術ニ益ナシ。今、是ニ瘍瘡ヲ患（ラフ）者アリ。コレヲ診ス。陽虛ノ者アリ。血虛ノ者アリ。氣血共ニ虛スル者アリ。是ヲ視テ治術ヲ施シ、且（ツ）藥ヲ投ズルハ、其（ノ）常ニ復スルコト速ヤカナリ。若（シ）知ラズシテ外治ノミニテ瘡瘍ヲ發スル時ハ、タトヒ曰ヲ經（ル）ト雖モ、癒（シ）難（シ）。且（ツ）癒（シ）難（キ）ノミニ非（ラ）ズ。荏苒トシテ命ヲ損ズルニ至ル者、閒（マ）アリ。爲ニ醫者ハ其（ノ）氣虛タルヲ診視シテ、知ラザルベカラズ。是ヲ知ルニハ、内治ヲ精（シク）スルニ非（ラズ）ンバ、得難（キ）者ナリ。今、瘡瘍ヲ治スニ、氣血ノ虛スル者ハ、癒（エム）ト欲スレドモ、癒（エ）難シ。氣血ノ壯（ノ）者ハ、癒エ難キ者ト雖（モ）速（カ）ニ癒ユル者ナリ。」²³

この中で、青洲は、「瘍瘡」、すなわち體表上に發症する皮膚疾患に對する外科的な治療や投薬は、患者の人體内部の「氣」・「血」の虚實という内科的原理を前提としなければならないと説いている。そして、その中で、外科的治療を行う場合も「内治ヲ精（シク）スルニ非（ラズ）ンバ、得難（キ）者ナリ」として、内外兼脩の必要性を力説している。また、たとえば、青洲は、『瘍科瑣言』において、「癰疽」を論ずるなかで、次のように言っている、

「癰ハ壅ナリ。フサグト訓ズ。陽狀（ニシテ）、六府ニ屬（スル）者ナリ。血凝滯スト雖モ、氣能ク循環ル故ニ、其（ノ）形チ、高腫（シ）、起頂尖子「未詳」ノ如シ。…疔ハ沮ナリ。ハバムト訓ズ。陰狀（ニシテ）、五臟ニ屬（スル）者ナリ。毒氣深クシテ、氣血共ニ病（ム）ガ故ニ、其（ノ）形、初起（ハ）粟粒ノ如キ者出テ、痛ヲ知ラズ。暈ハ廣ケレドモ、高ク起（コ）ラズ。…凡ソ此（ノ）二症ヲ生ズルハ、

多クハ、肥胖ノ人（ナリ）。或（ハ）膏梁厚味ノ物ヲ食スルニヨリテ血氣凝滯シテ患ルナリ。…」²⁴

ここでは、青洲は、「癰疽」、すなわち皮膚深く生ずる悪性の皮膚疾患を五臟六腑と関連づけ、その病理と病因を内科的概念である「（陽）氣」・「血」の循環の不調という原理で説明している。

これらは、外科的症狀やその治療を内科的觀點から説明するものである。これとは逆に、青洲の「内外合一」の發想は、いま一つの側面、すなわち内科的疾患を外科的な施術によって治療する革新的な治療法を導いた。冒頭に掲げた墓誌は、次のような青洲の語を引用していた、「曰、凡療疾、其處方制劑、不必拘局方。藥餌所不及、可以針灸治之。針灸所不及、可以剝腹背、可以湔腸胃。苟可以活人、何所不爲。」

すなわち、内科的疾患に對して、藥餌治療を施し、效を奏しなれば、針灸を用い、なおも效を奏しなれば、外科的切開手術を施して、患部の洗浄などの治療を施すのである。「いやしくも以って人を活かす可くんば、何の爲さざる所ぞや」の語が、青洲の醫の思想の力強さを最も雄辯に語っている。そして、この内外の垣根を取り拂った斬新な發想に基づく施術のうち最も傑出したものが、全身麻酔を用いた癌摘出の施術にほかならなかった。乳癌摘出切開手術の治験を記した青洲の『乳巖治驗錄』においても、青洲はまず、「震（ニ青洲）嘗繼父之業、行内外治、已二十有餘載焉」と述べ、乳癌治療が「内外の治」の發展であると自己規定している。

以上のように、青洲における「内外合一」ということは、第一義的には、内外兼脩ではない。それは、人體の内部の生理・病理と人體の外表のそれとが、實は一つの原理によって貫通され、その両者が緊密に連動しているという認識であり、それは青洲の教養の基底にある朱

子學的な「理」の普遍性と一貫性の思想の、醫學における活用である
と看做すことができる。

其の二 「活物窮理」の説

華岡青洲は、人體の内部と人體の外表とは「一理」によって貫通されて
いるという基本的な認識をもっていたことは、既に述べた。では、
この「一理」を如何にして窮めるのか。この點をめぐって、青洲は
「活物窮理」という旗幟を掲げた。華岡青洲が揮毫した自筆の書に
「醫性在活物窮理」というのがある。青洲が「活物窮理」という語を
綱領的な口號としていたことが知れる。また、既に引用した墓誌にお
いても、『皇國名醫傳』においても、青洲が京都遊學で「世醫」の限
界を感得した後、紀州に歸國して、新たに「内外合一」とともに「活
物窮理」の説を唱えたことが述べられていた。

ところで、この口號の表現は、遑れば、言うまでもなく、『大學』
の「致知在格物」と『易』説卦傳「窮理盡性、以至天命。」とを結合
した、朱子學における「格物窮理」の語に由來する。朱熹の『大學章
句』は、經文「致知在格物」に注して、次のように言う、

「格、至也。物、猶事也。窮至事物之理、欲其極處無不到也。」²⁷

また、經文「此謂知本、此謂知之至也」について、次のように言う、
「所謂致知在格物者、言、欲致吾之知、在即物而窮其理也。蓋人心之
靈莫不有知、而天下之物莫不有理。惟於理有未窮、故其知有不盡也。」²⁸

この二例から解かるように、「易」にもとづく「窮至事物之理」あ
るいは「即物而窮其理」は、『大學』の「格物」の言い換えにはかな
らない。ひらたく言えば、「格物窮理」は、事物の原理を究極まで窮

めることにほかならない。

しかし、華岡青洲は、「理」の追究を、朱子學流の「格物窮理」で
はなく、「活物窮理」と言い換え、自らの醫學説を象徴する口號とし
た。その場合、青洲は、「格物」を「活物」と言い換えることによ
って何を含意せしめようとしたのか、そして、窮めるべき「理」とは具
體的に何なのか、この二點を考えてみる必要がある。

ところで、ここで青洲が「格物」に代えて口號の語とした「活物」
とは、まさしく、伊藤仁齋・荻生徂徠らのいわゆる江戸古學派が朱子
學を批判して到達した世界觀を象徴する語にほかならなかった。

伊藤仁齋は、その著『語孟字義』卷之上（理、凡五條）において、
まず「理」と「道」の字義について、次のように言っている、

「理字與道字相近。道以往來言。理以條理言。故聖人曰天道、曰人道。
未嘗以理字命之。易曰、窮理盡性、以至于命。蓋窮理以物言。盡性以
人言。至命以天言。：聖人何故以道屬之天與人、以理字屬之事。曰、
道字本活字、其所以形容生々化々之妙也。若理字本死字、從玉里聲、
謂玉石之文理、可以形容事物之條理、而不足以形容天地生々化々之妙
也。蓋聖人以天地爲活物、：老氏以虛無爲道。：樂記有天理人欲之言、
本出於老子、而非聖人之言。」²⁹

ここで、仁齋は、「理」と「道」の異なりを論じ、「理」は事物の靜
的な攝理を表す語であり、「道」は人間の活動の「生々化々之妙」を
表す語であり、人間の或は天地萬物の「天地生々化々之妙」の營みは、
「理」の語によっては覆い盡せぬものであるとして、朱子學の「天理」
の説を批判する。かく天地萬物を以って「生々化々之妙」と看做すの
が仁齋の「活物」の世界觀にほかならない。伊藤仁齋は、また、その
著『童子問』において、次のように言っている、

「…聖人は天地を以て活物と爲（し）、異端は天地を以て死物と爲（す）。此の處、一たび差えば、千里の繆りあり。蓋し天の活物（と）爲る所以の者は、其の一元の氣有るを以てなり。一元の氣は、猶人の元陽有るがごとし。飲食言語、視聽動作、身を終うるまで息むこと無し。正に其の元陽有るが爲めなり。若し元陽一たび絶すれば、忽ち異物と爲って、木石と異なること無し。唯天地は一大活物、物を生じて物に生ぜられず、悠久窮まり無し。」（『童子問』第六十七章³¹）

このように、伊藤仁齋にあっては、天地萬物が「生々化々」して已まざる「活物」である所以は、「二元の氣」の流行に在る。仁齋はまた言う、

「問う、先生、天地は一大活物、理の字を以て之を盡くすべからずと謂う。即ち字義に所謂、生有って死無く、聚有って散無く、生に一なるが故なり、の理か。曰く、然り。凡そ天地の間は、皆一理のみ。動有って靜無く、善有って惡無し。蓋し靜とは動の止、惡とは善の變、善とは生の類、惡とは死の類、兩つの者相對して並び生ずるに非ず。皆生に一なるが故なり。凡そ生者は動かざること能わず、惟死者にして後其の眞靜を見る。…」（『童子問』第六十九章³²）

このように、「氣」の已まざる作用としての天地萬物、あるいは人間の營爲は「動」を基本的な在り方としており、その「動」は「靜」に對する相對の「動」ではない。萬物にあって、活動は、靜止と對になる相對概念なのではなく、生命ある者の活動こそが絕對の事實なのである。

以上のごとく、伊藤仁齋は、天地萬物を「氣」の流行にもとづく「生々化々」して已まざる「活物」と看做したわけであるが、荻生徂徠は、これこそ仁齋の學の精髓であるとして、それを繼承した。荻生

徂徠はその著『護園隨筆』で次のように言っている、

「仁齋之學、其骨髓在天地一活物。此其所以踰時流萬萬。其言曰、天地化、生生無窮。…其富有之盛、則愈々倍蓰、雖極天下之巧、不能算焉。…」（『護園隨筆』卷一³³）

徂徠も、かかる「活物」觀にもとづいて、朱子學の「天理人欲」や「格物致知」の説を批判する、

「（通鑑綱目は、）皆、朱子流の理屈に罷成（と）可申候。…天地も活物に候、人も活物に候を、繩などにて縛りからげたることく見候は、誠に無用之學問にて、只、人の利口を長し候迄にて御座候故、事實計之、資治通鑑はるかに勝り申候。」（『徂徠先生答問書』卷上（第三信）³⁴）

「總して風雲雷雨は天地の妙用にて、…古より陰陽之氣共申、或は鬼神之所爲共申、或は獸之類共申候。畢竟天地は活物にて神妙不測なる物にて候を、人の限ある智にて思計り候故、右のことくの諸説御座候得共、皆推量之沙汰にて、手にとり候様なる事は御座候。…格物致知と申事を宋儒見誤り候てより、風雲雷雨の沙汰、一草一木の理までをきはめ候を學問と存候。…宋儒の説は、人ならぬ事を立てて人を強ゆるにて候。…天地の妙用は人智の及ばざる所にて候。草木の花さきみのり、水の流れ山の峙ち候より、鳥の飛び獸のはしり、人の立居、物をいふまでも、いかなるからくりといふ事を知らず候。理學者申候筋は、陰陽五行などと申候名目に便りて、おしあてに義理をつけたる迄に、而、それをしりたればとて、誠に知ると申候物には無之候。」（『徂徠先生答問書』卷上（第八信）³⁵）

以上のように、仁齋・徂徠らに代表される江戸古學派の到達した世界觀は、人間を含む萬物の營爲をば、「氣」の流行のゆえに「生々化々」して已まざる「活物」であると看做し、朱子學におけるがごとく靜的

な「理」の概念では覆い盡せぬものと看做すものであった。

華岡青洲はこのような「活物」の語を古學派から繼承し、「格物」を「活物」と言い換えて、「活物窮理」を綱領的な口號としたのである。しかし青洲自身がこの點を詳論した資料は極めて少ない。札幌在住の華岡本家が所藏する春林軒傳本の資料の中に、「序」とのみ題した、凡そ四紙、百十八字から成る文章がある。末尾に「青洲書」と記されており、筆蹟から見ても青洲の自筆であることは、疑いの餘地はない。その本文に言ふ、

「先有疾醫瘍醫内外之分矣。重内輕外、自古已然。然未有不精乎内而能治外者也。蓋善工者、精於内而知外。其精於内、知外者、先竭心思、而明方技、以致知、研技術。以活物而究其理、兩相得而知内外焉。於是始可與言瘍醫矣。故餘嘗曰、欲救疾病、當精其内外。方無古今、唯在致其知、此之謂也。」

この「序」は、「内外合一」を説いているわけであるが、その中で、「活物」という觀點を用いて「理」を窮めれば、内科的な生理・病理と外科的な生理・病理とが、兩つながら會得されるとする。青洲がその「内外」を「一理」として一貫して捉えるべきであったことは、既に述べた。そもそも、活きた人間の生理や病理というものは、内發の原因が外表に及んだり、逆に、外發的な原因が體內に及ぶということとは、當然有り得ることである。青洲において、「活物」という觀點によって「理」を窮めるということは、活きた人體の生理や病理を絶えず「生々化々」する「妙」なるものと看做すということを意味するとともに、それは、人間の體を内と外に區切ることなく、一箇の生命體ととらえるということを意味するであらう。

このような「活物」の人體觀は、具體的な醫療の場面においては、

固定的な見方にとらわれない臨機應變の治術を導く。青洲の著書のかなかに、丸藥と散藥の使用法に關する便利帳とも稱すべき處方集『丸散便覽』があり、諸本には「序」は付いていないのであるが、札幌在住の華岡本家が所藏する春林軒傳本の資料の中に、寛政二年（一七九〇年）の紀年を有する「丸散便覽序」の稿本が傳存する。その中で、青洲は或る人の問いに答えて次ぎのように言ふ、

「…子若欲其精乎、則在於明其藥之所至、察其病之所在、以得其標準也。請以射喻。夫射者、將射也、必心平體正、持弓失審固、視鵠精明、然後可以言中矣。苟不審固精明、則不失「↓矢」正者幾希。是故審固者、明其藥之所至也、察其病之所在也。藥之不明、病之不察、則不失標準者鮮矣。夫既竭心思焉、繼之以應變權宜之策焉、寓其巧智、神定守固、心（不？）爲外物所謬、以樂以致、游心於與幾、「幾」於得其標準焉、則於治病雖不中不遠矣。乃所謂精也。」

このなかで青洲は、醫師たる者は、治療に當たって、まず「其の藥の至る所を明らかにし、其の病の所在を察して」、然る後に、「應變權宜の策」を驅使すべきであると述べている。冒頭に掲げた墓誌は、「凡療疾、其處方制劑、不必拘局方。藥餌所不及、可以針灸治之。針灸所不及、可以割腹背、可以瘍腸胃。苟可以活人、何所不爲。」という青洲の語を引いていた。この中で、藥餌を施して効果を奏しなければ、針灸を施し、それを以ってなお効果を奏しなければ、切開手術という外科的措置を試み、「苟くも以って人を活かすべくんば、何の爲さざる所ぞや」という。かく内科と外科を跨ぐ臨機應變の治術は、人體の生理・病理を「生々化々」する「活物」として捉えて始めて可能となるものであらう。

其三 「萬病一毒」の説

既に、華岡青洲の「内外合一」の口號を論ずる中で、人體の内部と人體の外表とを「一理」が貫通しているものとする、青洲の基本的な認識を述べた。では、その「一理」とは具體的に如何なることなのか、という問題が残る。それについても、青洲自身が詳論した資料は極めて少ないのであるが、それを考える手がかりとして、札幌・華岡本家所藏の春林軒傳本資料の中に、「萬病一毒之説」と題する、凡そ四紙、一五五字の文章が傳存する。末尾に「華岡青洲震／右門人某請豫説爲書」と記されており、筆蹟から見ても華岡青洲の自筆であることは、疑い得ない⁴⁰。その本文に言う、

「世人以一毒見一箇之事、爲人身所固有之毒。愚按、此説誤也。一毒之一、總一之一、而非一箇之一。其例如左。説文（説文：衍字）曰、初大始、道立於一。造分天地、化成萬物。大學、自天子以至於庶人、壹是皆以脩身爲本。史記禮書、總一海內。」⁴¹

ここで青洲は、吉益東洞（一七〇二〜一七七三年）の特有の病理觀である「萬病一毒」説における「一」の語義を論じているわけであるが、そのことの意義については後述するとして、ここではまず、青洲門下において、東洞の「萬病一毒」説の解釋が大きな問題として論じられていたことを確認しておきたい。東洞は、青洲が若き日に師事した吉益南涯の父であり、言うまでもなく古醫方を確立した大家である。青洲がこの東洞・南涯父子の學統を重視してやまなかったことは、華岡春林軒に、東洞の『藥徵』・『醫斷』など、また南涯の『傷寒論正義』・『南涯先生治驗錄』・『南涯先生口授』などの書が所藏され、華岡門下生がそれらを筆寫していたことから、知れる⁴²。ここでは、

まず東洞の「萬病一毒」説について検討しておきたい。

東洞は、その著『醫事或問』上卷⁴³の冒頭において、まず醫學の系統として、「疾醫」・「陰陽醫」・「仙家醫」の三つの流れがあったことを論じて、次のように言っている、

「或問曰、醫家のわかれたる事いかん。答曰、古昔、醫者に三あり。曰、疾醫、曰、陰陽醫、曰、仙家醫、是なり。周禮に所謂、疾醫は、病毒の所在を見定め、其の毒に方を處（ツ）けて、病毒を取去るゆへ、諸病疾苦、盡（ク）治す。扁鵲・仲景のする所、是なり。陰陽醫は、不視病所在。唯陰陽五行相生相克、經絡等を以（て）病を論ず。皆臆見ゆえ、手に取りて治する事あたはず。漢の太倉公、是なり。仙家醫は、氣を煉（り）、或は煉丹を服し、人をして造化にひとしくせん事を學ぶゆへ、行う人すくなく、害も亦すくなし。葛洪・陶弘景・孫思邈等、是なり。夫、疾醫は、萬病一毒という事を疑なく會得し、此の藥方にて此の病毒解するといふ事を心に覺るゆへ、病治せざる事なし。」⁴⁴

この中で、東洞は、醫の傳統の中に就いて、一方で、陰陽五行や經絡といった觀念論的概念を驅使して醫を論ずるいわゆる「陰陽醫」の傳統を「臆見」として斥け、また、煉氣・煉丹を説くいわゆる「仙家醫」の傳統を無益無害として貶めた。そして、他方において、彼が奉ずる「疾醫」の傳統をば、「疾醫は、病毒の所在を見定め、其の毒に方を處（ツ）けて、病毒を取去るゆへ、諸病疾苦、盡（ク）治す。」と述べ、かかる立場を「萬病一毒」の説と稱した。これを換言すれば、「疾醫」は、病毒の所在を見定める診斷學と病毒を取り去るための處方論に立脚するということになり、その兩者において關鍵をなすのが「毒」という概念とされる。東洞はまた言う、

「夫、諸病ともに一つの毒ありて、その毒動き萬病を發すなり。故に萬病ともに小柴胡湯の症を發すれば、小柴胡湯をあたへ、桂枝湯の症を發すれば、桂枝湯をあたふ。各其(の)症に隨て是を治す。是(れ)仲景の萬病を治するも一の毒を目當にしたること明なり。扁鵲曰、病應見于大表。是(れ)大表に在(り)とはいはず、大表にあらはるといふ時は、則(ち)腹中に一毒ある事を知るべし。其(の)毒動きて萬病を發す。頭にありては頭痛をなし、腰にありては腰痛をなし、足にありては痿躄をなすの類、千變萬化あげて數ふべからず。是、扁鵲・仲景も萬病一毒と見たること明らかなり。…」(『醫事或問』下卷)⁽⁴⁵⁾

このように、東洞は、諸の病の發生を「一毒」の發動に因るものと説き、「毒」の發動としての「症」を見極め、それに對する處方を決定していくことを醫學の正道と看做している。これは引用文の中に指摘するように、張仲景(二世紀末)三世紀初)の『傷寒論』の立場である。その場合、東洞は何故に診斷と處方における關鍵の説明概念として、極めて單純化された「一毒」という概念を主張したのであろうか。その意圖は、東洞のいわゆる「陰陽醫」の傳統、あるいは「後世醫」が觀念論的な陰陽五行や經絡の概念を用いて展開したところの病因論を排斥することにあつた。東洞は常々「因を論ぜず」ということを標榜したが、それを訊ねた或る人の問いに答えて、次のように言っている、

「此(の)毒、何の毒にして、何によつて動くといふ時は、因を論ずるといふものなり。吾いふ所は、しからず。其(の)毒何によりて生ずるや、何によりて動くやといふ事は知らず。唯、毒の所在を視て療治するなり。因を論ぜずといふ主意は、臆見に落ちて、治療なりがた

く、殊に道を害することあるゆへなり。其(の)發る故のなきといふにはあらず。其(の)發る故をほりうがちて論じ理を窮る事、人力の及ぶ所にあらず。しかるに後世の醫は専ら其(の)理を窮る事をつとむ。然れども病を視定めざるゆへ、日々方を變ず。なんぞ病を視定めて藥方を變る事あらん。是、口に病因をいへども、心に知らざる故なり。たとへ因をしるとも無益なり。因なしと言(ふ)は無理なり。唯、空論理屈にて、道に害あるゆへ、吾黨にはいはざるなり」(『醫事或問』下卷)⁽⁴⁶⁾

この中で、東洞が「唯、毒の所在を視て療治するなり」と述べているのは、診斷と處方の經驗にのみ信頼を置くことであり、かたや「空論理屈」とは、いわゆる「陰陽醫」の傳統における「陰陽五行相克相生」や「經絡」の概念を用いた病因論を指す。東洞はその著『醫斷』において、「五行論」や「經絡」論を批判して、次のように言っている、

「五行之說、已見虞書及洪範、下至漢儒、熾言之。素門(ママ)・難經、欲由是以總天下之衆理、窮人身之百病。說之若符契然。雖然、要皆論說之言已。今執其說、施之七術、則致謬千里。是吾黨所以不取也。後人增演其說、以誇窮理、可謂無用之徒也已。」(『醫斷』・「五行」)⁽⁴⁷⁾

「十二經十五絡者、言、人身氣脈通行之路、醫家之所重也。然、無用乎治矣。是以不取也。…陰陽不可強爲之說。非唯無益於治、反以惑人。」(『醫斷』・「經絡」)⁽⁴⁸⁾

このように、東洞においては、「五行」論や「經絡」論は「致謬千里」あるいは「非唯無益於治、反以惑人」と言うべき有害な臆説であつた。

ところで、東洞によれば、この體中の「毒」を解くものが「藥」

にほかならぬわけであるが、古醫書以來、この「藥」もまた「毒」と稱され、疾病の治療に「藥」としての「毒」を用いることに對する世人の畏怖について、東洞は、次のように言う、

「毒とばかりいふは後世の事なり。古書には毒とあり。いまだ藥とばかりいふたる事を聞かざるなり。…其（れ）毒藥を人に與へるものゆへ、知らぬ人は恐るる苦なり。…藥は同じ毒藥なれど、唯、藥方のくみ合わせの違ひなり。能（く）其（の）事を得たる人は、毒藥を用るに恐るる事なし。…吾輩の毒藥を用ゆるも然り。此（の）毒藥にて此（の）病は治するといふことを知たる故、少しも恐るる事なし。」
 『醫事或問』上卷⁸⁰

この引用文の末尾において、「吾輩の毒藥を用ゆるも然り。此（の）毒藥にて此（の）病は治するといふことを知たる故、少しも恐るる事なし。」と東洞が豪語していることに特に注目したい。東洞は何故に、「吾輩は…知りたる」と言い切れるのであろうか。それはひとえに、東洞自身の診斷と處方の經驗から得られた確信である。

ところで東洞のいわゆる「萬病一毒」における「毒」の概念そのものは、極めて漠然としていて、曖昧さを留めている。『醫事或問』について見るに、東洞は基本的には「毒」をば後天的な生活習慣の中で體中に蓄積された發病の因素と看做し、この體中の「毒」が何らかの誘發的原因によつて發動するのが「病」であると考へてゐる。たとへば、「風」病は「天の氣に感じて腹中の毒動く」と説明され、食中毒は「食物…腹中の毒にあたる」と説明されるが、その「毒」そのものは「腹中」に在つて、病氣は「腹中の毒、動きて氣をわずらわしむるもの」と説明される⁸¹。また、「病毒は生まれて後、生じたるものゆへ、毒藥にて取去るるものなり」(『醫事或問』上卷)⁸²と言ひ、さらに、

「都ての人、病毒静まりてある時は、毒なしとおもふものなり。其（の）静まりてある時、病毒を取去れば、百病を發することなし」(『醫事或問』下卷)⁸³というがごとく、「腹中」の「毒」は後天的に「腹中」に蓄積されたものであつて、その作用の如何が疾病の潜伏と發症となるとされる。

さて、青洲は、東洞のこのような「萬病一毒」説を繼承したわけであるが、「一毒」という概念に對しては修正を加へてゐると看做すべきである。東洞は先に引いた『醫事或問』下卷の文章の中で、「夫、諸病ともに一つの毒ありて、その毒動き萬病を發すなり。」(『醫事或問』下卷)と述べていたが、これを文字通り解すれば、萬病の因素として二元的な一箇の「毒」というものが存在することになる。そしてこの「一箇」の「毒」というものが檢證し得ない曖昧な概念である限り、東洞の病理論はいま一つの觀念論に陥る可能性を免れ得ない。

しかし、青洲は、本節の冒頭に掲げた「萬病一毒之説」において、「世人は一毒を以て一箇の事と見、人身の固有する所の毒と爲す。愚按ずるに、此の説は誤りなり」として、東洞のいわゆる「一毒」を、體中に固有する一箇の實體的な病因と看做す解釋を誤りとして排斥する。そして、「萬病一毒」の「一」の語義を論じて、「一」は「一箇」ではなく「總」すなわち「すべて」の義であると論じた。すなわち青洲流に解すれば、「萬病一毒」とは、全ての病は總じて(「一」として)「毒」に由るといふことであつて、諸病の原因として「一箇」の「毒」なるものが存在するということではない。「毒」の概念に限れば、青洲において、より曖昧になつたと言えるかも知れない。しかし青洲は少なくとも觀念論的な病因として檢證不可能な「毒」というものを措定する病因論からはより遠ざかつてゐる。

實際、青洲の著『瘍科瑣言』や『燈下醫談』において、「毒」という語が頻繁に用いられている。しかし、それは「病因」としての實體的な「一箇」の「毒」ではない。たとえば、「結毒ハ所在ヲ限ラス。古キ毒滯リテ發スル也。或ハ口眼高斜、或手足不遂、或骨節疼痛。其變許リ難シ。桂枝加朮附湯に七寶ヲ兼用シテ久シク用可。…」（『瘍科瑣言』卷上、「結毒」）と言うが如く、體の各部位において「古キ毒ノ滯リ」により、顔面のひきつり・手足の不隨、骨節の痛み等の病症が発生するとされる。また、「疔ハ釘也。甚痛烈シクシテ釘ヲ打ガ如ク也。…又一方ノ鬢脱落スルアリ。毒ノ深キヲ知ベシ。…紅絲疔ハ手に生スレバ腋下ニ至リ…凡、其毒走ル處ハ紅絲ヲ引也。…火焰疔ハ…毒勢甚シテ火焰ノ如シ…」（『瘍科瑣言』卷上、「疔瘡」）、あるいは、「下疳ハ陰莖ノ瘡…痒者ハ毒淺ク、痛強者ハ毒深シ…」（『瘍科瑣言』卷上、「下疳」）などの用例を要するに、「毒」は病の深淺や發症の仕方の説明する説明概念に過ぎない。また、治療に就いても、「…然レドモ、（下毒は）其ノ毒ノ淺深ヲヘテ下スベシ。毒深キモノハ下劑許リニテハ消散セザル也。」（『瘍科瑣言』卷上、「便毒」）と言うが如く、「毒」は病の進行の度合いを言う説明概念に過ぎない。既に引いた青洲の「萬病一毒之說」は、「一毒を以て一箇の事と見る」ことを排斥していた。このことを踏まえて、青洲のいわゆる「毒」の概念を考えてみるに、「毒」とは、疾病の發生と進行の機序を説明するための單なる説明概念に過ぎないことがわかる。「毒」の深淺や發症の仕方を見極めるのは診斷であり、それに基づいて處方が決められる。その中で、診斷と處方の目安となるのが「毒」の概念にはかならないのである。

ともあれ、吉益東洞の「萬病一毒」説の主眼は陰陽五行論や經絡論

に基づく觀念論的な病因論の穿鑿を排除して、病毒の所在を見定める診斷と病毒を取り去るための處方に立脚するということに在った。あるいは、診斷と處方という經驗の重視の立場であったと言い換えてもよい。青洲も、既に引用した「丸散便寬序」において、「審固者、明其藥之所至也、察其病之所在也。藥之不明、病之不察、則不失標準者鮮矣。」と述べ、病の所在を察する診斷と、藥效に對する正しい認識の重要性を強調している。かかる意味においては、青洲は東洞の諸説を忠實に繼承している。青洲における東洞の「萬病一毒」の「一」の概念の修正は、東洞の「萬病一毒」説が觀念的な病因論に解釋される餘地を更に排除して、醫學を更に一步、經驗重視の立場に近づけようとするものであったと思われる。

まとめ

以上、華岡青洲の醫學思想を論じてきた。とはいふものの、青洲自身が醫學の思想もしくは原論を正面から論じた著述は極めて少ない。これは經驗と實踐を重んじた醫師としては當然であろう。そのため、本小論は、華岡青洲が綱領的な口號とした「内外合一」・「活物窮理」・「萬病一毒」の三説に的をしぼり、それらの意味を、先行する儒學および醫學の諸説を検討することを通じて、考察するに止まった。そのなかで、

(一) 青洲の「内外合一」あるいは「内外一理」の口號の中には、朱子學における「理」の普遍性と一貫性の思想、およびそれに基づく強烈な「窮理」の精神が繼承されており、それに基づいて、青洲は内科の對象とする人體の内部と外科が對象とする人體の外表の生理・病理を一元的に捉え、結果として、内科學と外科學の統

合を行つたこと。

(二) 青洲の「活物窮理」の口號の中には、伊藤仁齋・荻生徂徠らの江戸時代古學派の、萬物を「生々々々」して已まざる「活物」と捉える世界觀が繼承されており、それに基づいて、青洲は人體を「活物」と捉え、その結果として、古書や傳統的な説にとらわれない斬新な治療法、あるいは内科と外科に跨る臨機應變の治療法を開發し得たこと。

(三) 青洲の「萬病一毒」の口號の中には、吉益東洞の「萬病一毒」の説における、觀念論的な陰陽五行論や經絡論を排除し診斷と處方の經驗を重んじる思想が繼承されており、青洲は、さらに「一毒」の概念を脩正することにより、吉益東洞の病理論が孕む觀念論的解釋の可能性を排除して、醫學をより一層、經驗重視の側に近づけようとした。

本小論は、以上の三點を明らかにしたつもりである。華岡青洲は、このような思想に基づき、乳癌切開手術をはじめとする斬新な治療法と、麻酔薬「通仙散」をはじめとする多くの薬方を開發した。青洲の醫學と藥學の實踐の中に、青洲の、より具體的かつより活き活きとした思想を探ることが、今後の課題である。

注

(1) 『乳岩姓名録』には、兩本が現存する。一は札幌・華岡本家所蔵本であり、吳秀三氏の著書『華岡青洲先生及其外科』二七四頁〜二八六頁に活字化されて收録されている。いま一本は、和歌山縣立醫科大學の舊蔵本で、現在は大阪府熊取町在住の醫師・高橋均氏の所有に歸している。

その異同についての考證は、松木明知氏の『華岡青洲と「乳岩治療録」』VII「乳岩姓名録」一寫本の比較検討に詳しい。なお、今回の小論の執筆に當り、高橋氏の所蔵資料（その一部分は和歌山縣紀の川市の顯彰施設「青洲の里」に移管されている）を貸與閱覽させていただいた。深甚の謝意を表わしたい。以下、高橋氏所蔵の資料を「高橋コレクション」蔵本」と稱する。

(2) 吳秀三著『華岡青洲先生及其外科』四四八〜五一八頁に、活字化して收録されている。

(3) 青洲の末弟・華岡良平が主宰した大阪・中之島の分塾「樂水堂」の門人を含む。

(4) 青洲の傳記に関する原資料は、「華岡青洲墓誌銘」のほか、青洲の弟子（名は未詳）が書いたとされる『華岡青洲略傳』が傳存し、吳秀三著『華岡青洲先生及其外科』に部分的に引用されているが、筆者は未見。これ以外に、淺田惟常著『皇國名醫傳』（嘉永四年、一八五一年刊、東京大學附屬圖書館藏）の下巻に「華岡隨賢傳」がある。

(5) 稿本は、和歌山大學附屬圖書館紀州藩文庫に所藏。影印本は、一九三五年、南紀徳川史料刊行會刊行。

(6) 『醫聖・華岡青洲』、森慶三・市原硬・竹林弘共編（華岡青洲先生顯彰會刊行、一九七四年）四九頁〜五〇頁。

(7) (引用文の書き下し文)「華岡青洲墓誌銘」君、諱は震、字は伯行、隨賢と稱し、別號は青洲。橘の姓、和田の氏。其先、和田五郎・政之、河内郡華岡に家し、因りてこれを氏とす。六世の祖、傳之丞、畠山高政に事ふ。高政亡じて、本藩の那賀郡麻生津莊赤沼田に來たり、ここに處る。其の子、傳左衛門、慶長中に名手莊に移る。高祖、諱は尙親、また西野山邸平山に移る。王父靈仙翁に至り、始て醫を以て業と爲す。考は諱、尙道。妣は松木氏。男女五人有り。君は其の長子なり。幼にして穎敏、氣宇は英邁、家祖業を承け、醫術を研精す。僻邑にして師友に乏しく、

乃ち京師に遊び、桃谷華洲、山田靜齋の諸子を友とす。また吉益南涯翁に從ひて、氣血水を講ず。また大和見水翁を師とし、外治を學ぶ。其の他、從ひて遊ぶ所、常師無し。磨淬すること數年、殆ど寢食を廢す。既にして悟りて曰く、世醫の論ずる所は、舊方に局し、經語に泥して、これを活用すること能はず。また科を分ちて内外と爲し、合一の理を知らず。是れ安くんぞ痼を起し沈を救ふに足らんや。乃ち翻然として去り、其の郷に歸る。遂に内外合一、活物窮理の説を唱ふ。曰く、凡そ疾を療するに、其の處方劑は、必ずしも局方に拘せず。藥餌の及ばざる所は、針灸を以てこれを治す可し。針灸の及ばざる所は、以て腹背を剝く、割以て腸胃を漉ふ可し。苟しくも以て人を活す可くんば、何の爲さざる所ぞや。今の蘭を言ふ者は、理に密なるも而して法に略たり。漢を奉ずる者は、法に精なるも、跡に泥す。豈に共に治を論ずるに足らんや。ここにおいて諸家を折中し、これを活用す。古に本づけて而して其の跡に拘せず、新を出だして而して失其の軌を失わず。奇疾異病の、萬書に不載せざる所も、手に隨ひて效を奏せざる者なし。郷隣の聞かざる者、始めは驚きて且つ排するも、終は皆心に欣び口に譽め、稱して華陀また出でたりと爲す。名聲は大いに海内に著る。沈痾疴篤疾に繋かれ、衆醫のこれを療すること能はざる者、皆、輿もて門に集り、里閉これがために填塞す。凡そ六十六州、國として來たらざるものなし。また醫生の塾に入りて業を受るもの、凡そ千百三十餘人なり。國を以てこれを數あふれば、其れ至らざる者、大隈と壹岐の二國に止まるのみ。其の治は、好みて家方の麻沸散、號して用通仙散と曰ふを用ゆ。其の強弱虛實を度り、沸湯してこれを服せしむ。既にして截斷し、漉洗して穢を刮き、疾を除きて乃ち已む。其の乳岩を療すること最も多し。前後愈ゆる者、數百人なり。其の他、奇を出し沈を起すこと、幾千人矣なるかを知らず。著す所は、瘍科瑣言、産科瑣言、瘍科神書、疔瘡辨明、乳岩辨、天刑秘錄、傷寒講義等の、二十七種なり。皆、其の治術の大意を言ふ。常に門人に

華岡青洲の醫學思想

語りて曰く、吾が術は心に得、ししかして手に應ず。口は言ふこと能はず、筆は書すこと能はず。能く視る者、これを領會するに有るのみと。また曰く、餘、内治を精敷するも、世は外科を以てこれを稱す。故に蘊する所いまだ盡さず。また遺憾なるか。平素より施を好み、務めて貧困を恤ふ。隣里これに由りて擧火する者、數十家なり。雅性は眞率にして、邊幅を脩めず、また聞達を求めず。故に就官に就かず。文政巳卯の歲、辟せられて醫員に列せられ、俸米若干を賜ひ、特に邑居を許さる。後また命ぜられて、侍醫に準ぜられ、俸を加ふること若干なり。天保の乙未、十月二日、病みて家に卒す。春秋七十六歲なり。邨中の地藏寺の先塋の次に葬らる。妹背氏を娶り、二男二女を生む。長は雲平と曰ひ、先に卒す。次は修平と曰ひ、其の業を繼ぐ。また奥義致男を養ひ、長女を以て之が妻とし、準平と曰ひ、また醫を業とす。次女は川端稠宜に適ぐ。門人と二平、謀りて曰く、先生は醫を以て海内に鳴り、功績は世に在り。豈に銘なかる可けんやと。來たりて餘に辭を屬す。餘は君と故あり、故に義として辭するを得ず。爲に其の治術の概略を書き、繋に銘を以てす。軒岐の術、經に泥し方に局し、錮弊に因循し、習ひて常と爲す。偉かな、この君、洗刷して一新し、沈を救ひ死を起す。海内に神と稱し、法は後世に傳へられ、遺澤は人に在り。貞珉に詞を勒したれば、千載なんぞ泯びん。天保六年、歲は乙未に在り、冬十二月。仁井田好古 撰し並びに書す。」

(8) 後掲の「主參考文獻」を参照。

(9) 墓誌銘には「高祖」(＝五世の祖)とあるが、世系を辿れば四世の祖であるから、「曾祖」と言うべきである。仁井田好古の誤記であると思われる。松木明知『華岡青洲と「乳巖治驗録」(後掲)の「I、仁井田好古の「青洲先生墓誌銘」の誤謬」に検討あり。

(10) 吳秀三著『華岡青洲先生及其外科』五頁～六頁。

(11) 吳秀三著『華岡青洲先生及其外科』一三頁～一四頁。

(12) 吳秀三著『華岡青洲先生及其外科』、第二卷「青洲先生ノ外科」(主トシテ其手術)・第一章「手術一般」、一九五頁〜二四三頁、また、富士川游『日本醫學史』第八章「江戸時代ノ醫學・季世・外科」、四四一頁〜四四八頁を参照。

(13) 『皇國名醫傳』は、このことについて、「於是用意製麻沸之方、號曰、通仙散。值癩瘡者、輒令先服之、昏醉、然後下手。乳巖・骨疽・痔漏・瘰癧・癭瘤之類衆、不敢治者、割剝洗滌、立刮穢毒、從以膏湯。功績奇偉、稱爲華陀復出。」と記している。なお、華岡青洲が得意とした乳癌摘出手術を始めとする外科手術、およびその時に用いた麻酔薬の開発の問題は、醫學史家によって既に多くの研究がなされている。吳秀三氏の前掲書、および松木明知氏『華岡青洲と「乳岩治驗録」』(岩波出版サーブिस、二〇〇四年三月)、ならびに同氏の『華岡青洲と麻沸散』(眞興交易醫書出版部、二〇〇六年八月)を参照。本小論では、この臨床や藥劑の問題は正面からは扱わず、専ら青洲の醫學思想に焦點を當てて論ずる。

(14) 吳秀三氏も、『華岡青洲先生及其外科』第三卷「青洲先生ノ著述」において、「青洲先生ノ著述ハ門人ノ筆記セル書冊ト圖卷トニ區別スベシ。…著書ハ何モ寫本ニシテ門人ノ筆記又ハ傳寫セルモノナリ」と述べている。同書、三八一頁。

(15) 松木明知『乳巖治驗録』は青洲の自筆ではない(『日本醫事新報』四〇三八號所收、二〇〇一年九月、日本醫事新報社)、また、松木明知「華岡青洲の『乳巖治驗録』の新研究(上)」(『麻酔』第四九卷第八號所收、二〇〇〇年八月、克誠堂出版)、松木明知「華岡青洲の『乳巖治驗録』の新研究(下)」(『麻酔』第四九卷第九號所收、二〇〇〇年九月、克誠堂出版)を参照。

(16) この文献學的作業は、現段階では緒に就いたばかりであり、本小論には反映し得ない。

(17) 著書・論文については、松木明知氏『華岡青洲と「乳岩治驗録」』(岩

波出版サーブिस、二〇〇四年三月)の凡例および、Ⅺ「華岡青洲研究文献一覽」に關係資料が網羅されている。

(18) 吳秀三著『華岡青洲先生及其外科』一九頁を参照。また松木明知氏の『華岡青洲と麻沸散』(眞興交易醫書出版部、二〇〇六年八月)第一章「華岡青洲の著述と思想」(「内外合一とは何か」は、「内外合一」を第一義的には内科と外科の統一と看做すが、加えて、漢方と蘭醫學の統合と解釋してもよいのではないかと述べている。しかし江戸時代にあつて漢方と蘭學を「内外」と捉えることは絶えて聞かない。臆説と言ふべきである。

(19) ここでは、程顥の用例は注に掲げるとする。たとえば、「所謂定者、動亦定、靜亦定、無將迎、無内外。苟以外物爲外、牽己而從之、是以己性爲有内外也。…不知性之無内外也。既以内外爲二本、則又烏可遽語定哉。」(『答橫渠張子厚先生書』、『河南程氏文集』卷二「明道先生文・其二」所收)

(20) (引用文の書き下し文)「問ふ、物を觀じ己を察し、還りて物を見るに因りて、反つてこれを身に求めるは、否かと。曰はく、必ずしも此の如く説かず。物我は一理にして、纔に彼を明せば即ち此れを曉る。内外を合するの道なり。」

(21) (引用文の書き下し文)「また問ふ、義は只だ事上に在るとは、如何と。曰はく、内外は一理にして、豈に特に事上に義を合するを求めんやと。」

(22) (引用文の書き下し文)「蓋し天人は一物、内外は一理にして、流通貫徹し、初より間隔なし。若し見得せざれば、則ち天地の間に生ずるといへども、而して天地の理たる所以を知らず、人の形貌ありといへども、而してまた人の理たるの所以を知らず。」

(23) (引用文の書き下し文)「蓋し、萬物の理の同じく一より出づるを必窮するを以つて格物と爲し、萬物の同じく一理より出づるを知るもて知至と爲し、如し内外の道を合すれば、則ち天人・物我は一と爲り…なる者

あり。似たり。然るに其れ萬物の理を必窮せんと欲して、而も専ら外物を指せば、則ち理の己に在る者において、明ならざることあり。…」

(24) 『近世漢方醫書集成』二九卷所收本、三八三頁〜三八四頁。

(25) 『近世漢方醫書集成』二九卷所收本、九七頁〜九九頁。

(26) 吳秀三氏家藏、複製本は「青洲の里」所藏。

(27) (引用文の書き下し文)「格は至るなり。物は猶ほ事のごときなり。事物の理を窮至し、其の極處として到らざるなきを欲するなり」。

(28) (引用文の書き下し文)「所謂る、致知は格物に在りとは、言ふころは、吾の知を致さんと欲すれば、物に即きて其の理を窮むるに在るなり。蓋し人心の靈は知ることあらざるなく、而して天下の物は理あらざるはなし。惟だ理に於いて窮めざるあることあるが故に其の知に盡さざるあるなり。」

(29) 伊藤仁齋・荻生徂徠の「活物」の世界観については、黒住眞氏の「伊藤仁齋の倫理——その基底場面をめぐって」(『思想』七六六號、岩波書店、一九八八年四月)、および「活物的世界における聖人の道——荻生徂徠の場合」(『倫理學年報』第二七集、一九七八年)を参照。なお、兩論文ともに、黒住眞氏の著、『近世日本社會と儒教』(ベリかん社、二〇〇三年三月)に再録されている。

(30) 『日本思想大系』第三三卷『伊藤仁齋・伊藤東涯』(岩波書店、一九七一年十月)、一二四頁。(引用文の書き下し文)「理の字と道の字は相ひ近し。道は往來を以て言ひ、理は條理を以て言ふ。故に聖人は天道と曰ひ、人道と曰ふ。いまだかつて理の字を以てこれを命じず。易に曰く、理を窮め性を盡して、以て命に至ると。蓋し窮理は物を以て言ひ、盡性は人を以て言ひ、命に至りては天を以て言ふ。…聖人は何の故に道を以てこれを天と人に屬せしめ、理の字を以てこれを事に屬せしむるや。曰く、道の字は本、活の字にして、其れ生々化々の妙を形容する所以なり。理の字のごときは本、死の字にして、玉に従ひ里

の聲、玉石の文理を謂ふ。以て事物の條理を形容する可きも、而るに以て天地生々化々の妙を形容するに足らざるなり。蓋し聖人は天地を以て活物と爲す、…老氏は虚無を持って道と爲す。…樂記に天人欲の言あるは、本、老子に出で、而して聖人の言にあらず。」

(31) 清水茂校注、岩波文庫『童子問』(岩波書店、一九七〇年、一二月) 一五九〜一六〇頁。

(32) 清水茂校注、岩波文庫『童子問』(岩波書店、一九七〇年、一二月) 一六二〜一六三頁。

(33) 『荻生徂徠全集』卷一所收、河出書房新社、一九七三年七月、四六六頁。(引用文の書き下し文)「仁齋の學は、其の骨髓は天地一活物に在り。此れ其の時流を驗ゆること萬萬たる所以なり。其の言に曰く、天地の化は、生生すること無窮。…其れ有の盛に當りては、則ち愈々倍蓰し、極天下の巧を極むといえども、能これを算ふること能はず。…」

(34) 『荻生徂徠全集』卷六所收本、一七八頁。

(35) 『荻生徂徠全集』卷六所收本、一八二頁。

(36) 松村巧・高橋均「華岡青洲自筆『序』考；現代語譯および注解」(『近畿大學醫誌』第二四卷第二號所收、一九九九年二月、近畿大學醫學部)を参照。

(37) (引用文の書き下し文)「先に疾醫・瘍醫、内外の分あり。内を重んじ外を輕んずるは、古くより已に然り。然して、未だ内に精ならずして而も能く外を治むる者あらざるなり。蓋し善工なる者は、内に精にして而も外を知る。其れ内に精にして外を知る者は、先に思心を竭し、而して方技を明らかにし、知致を以て、技術を研く。活物を以て、而して其の理を究めれば、兩つながら相ひ得て、而して内外を知る。ここにおいて始めて與に瘍醫を言うべし。故に餘(↓余)、嘗て曰く：疾病を救わんとすれば、當に其の内外に精しかるべし。方は古今なく、唯だ其の知を致すに在りと。此をこれ謂うなり。」

(38) 松村巧・高橋均「華岡青洲自筆『丸散便覽序』考；現代語譯および注解」『近畿大學醫誌』第二五卷第二號所收、二〇〇〇年二月、近畿大學醫學部を参照。

(39) (引用文の書き下し文。括弧内は筆寫が誤字を正したもの。):「子、もし其の精たらんを欲するか、則ち、其の藥の至る所を明らめ、其の病の所在を察し、以て其の標準を得るに在るなり。射を以て喩えんことを請う。それ射する者、まさに射せんとするや、必ず心は平らかに體は正しくして、弓矢(↓矢)を持つこと審固、鵠を視ること精明にして、然る後、以て中ると言うべし。苟しくも、審固精明ならざれば、則ち正を矢(↓矢)わざる者、幾んど希れなり。この故に、審固なる者は、其の藥の至る所を明らめ、其の病の在る所を察するなり。藥を明らめず、病を察せざるは、則ち標準を失わざる者、鮮し。それ既に心思を竭し、これに繼ぐに應變權宜の策を以てし、其の巧智に寓し、神は定まり守ると固く、心は外物の謬る所となら(ず?)、以て樂しみ以て致し、心と與幾に游ばせれば、其の標準を得るに幾し。則ち病を治すにおいて、中らずと雖も、遠からず。乃ち謂う所の精なりと。」

(40) 松村巧・高橋均「華岡青洲自筆『萬病一毒之說』考；現代語譯および注解」『近畿大學醫誌』第二四卷第二號所收、一九九九年二月、近畿大學醫學部を参照。

(41) (引用文の書き下し文)「世人は、一毒を以て一箇の事と見、人身の固有する所の毒なりと爲す。愚、按ずるに、此の説は誤れるなり。一毒の一は總の一にして、而して一箇の一にあらず。其の例は左の如し。説文に曰く、初め大始に、道は一に立ち、天地を造分し、萬物を化成すと。大學に、天子より以て庶人に至るまで、壹にこれ、皆、脩身を以て本と爲すと。史記・禮書に、海内を總一すと。。」

(42) ここに言う華岡春林軒藏の吉益東洞・南涯父子の書、および華岡門下生の抄本の多くは、現在、高橋コレクションに歸している。また、その

うち、華岡門下生(名は不詳)の筆録と思われる無題の筆録冊子(高橋コレクション所藏。全八紙)があり、それは吉益南涯の『右南涯先生造語』および華岡青洲の『丸散方機』の抜書きであるが、その中に、吉益南涯の『造語』からの抜書きとして、「萬病一毒。衆藥皆毒物。以毒攻毒。毒去體佳。」の語が見えている。

(43) 東洞自身が『醫事或問』下巻で言うように、彼が「萬病一毒」を構想したのは「醫斷」・『古書醫言』の著述時に遡るが、東洞がその後の醫療經驗を通じて、この説に對して搖るぎない確信を得たのは、後年の『醫事或問』の著述に至ってからである。『醫事或問』一書は、擧げて「萬病一毒」の説に基づいて醫の原論を展開した著述である。ここでは、「萬病一毒」説の晩年定論とも言うべき『醫事或問』について、その説を考へてみる。なお、館野正美氏の『吉益東洞「古書醫言」の研究』第二部「醫學思想編」第二節「古書醫言」中の『呂氏春秋』の項に見える醫學思想(汲古書院、二〇〇四年一月)は、東洞の「萬病一毒」説が『呂氏春秋』の「饕毒」説に淵源すると説いている。

(44) 『醫事或問』上巻、『日本思想大系』第六三冊、「近世科學思想・下」(岩波書店、一九七一年八月)所收、三四五頁。

(45) 『醫事或問』上巻、『日本思想大系』所收本、三六五頁。

(46) 『醫事或問』上巻、『日本思想大系』所收本、三六六頁。

(47) 高橋コレクション所藏、春林軒傳存本による。

(48) (引用文の書き下し文)「五行の説は、已に虞書、及び洪範に見え、下は漢儒に至りて、熾にこれを言ふ。素門(ママ)・難經は、これに由りて以て天下の衆理を總べ、人身の百病を窮めんと欲す。これを説けば契を符すがごとく然り。然りと雖も、必ずれば、皆、論説の言なるのみ。今、其の説を執りて、これを七術に施さんとすれば、則ち謬を致すこと千里なり。是れ吾が黨の取らざる所以なり。後人其の説を増演し、以て窮理を誇るは、無用の徒と謂う可きなるのみ。」

(49) (引用文の書き下し文)「十二經十五絡とは、人身の氣脈の通行するの路を言ひ、醫家の重んじる所なり。然るに、治に無用なり。ここを以て取らざるなり。…陰陽は強ひてこれが説を爲す可からず。唯に治に無益なるのみにあらずして、反つて以て人を惑わす。」

(50) 『醫事或問』上卷、『日本思想大系』所收本、三五七頁。

(51) 以上の引用は『醫事或問』上卷、『日本思想大系』所收本、三五〇頁。

(52) 『醫事或問』上卷、『日本思想大系』所收本、三五五頁。

(53) 『醫事或問』下卷、『日本思想大系』所收本、三三四頁。

(54) 『近世漢方醫學書集成』第二九卷(名著出版、一九八〇年四月)所收、一四九頁。

(55) 『近世漢方醫學書集成』第二九卷所收本、一〇九〜一〇二頁。

(56) 『近世漢方醫學書集成』第二九卷所收本、一三七頁。

(57) 『近世漢方醫學書集成』第二九卷所收本、一〇九〜一〇二頁。

〔主な参考文献〕

【傳記資料】(刊行されたもの)

淺田惟常『皇國名醫傳』下、高美屋甚左衛門刊行、嘉永四年(一八

五一年)東京大學附屬圖書館藏

【資料刊行】

近世漢方醫學書集成』第二九卷「華岡青洲」1(名著出版、一九八〇

年四月)、『外科神書』・『瘍科瑣言』・『燈下醫談』・『青洲先生

治驗錄』・『産科瑣言』の五種を収録。

近世漢方醫學書集成』第三〇卷「華岡青洲」2(名著出版、一九八〇

年四月)、『青囊祕録』『春林軒丸散方』・『膏方便覽』・『貼膏放』
・『瘍科方箋』・『春林軒撮要方箋』の六種を収録。

【総合的研究】

吳秀三『華岡青洲先生及其外科』、一九一九年八月初版發行。復刻版、
同朋舎、一九七一年三月

富士川游『日本醫學史』、京都帝國大學附屬圖書館發行、一九四二年

七月。復刻版、形成社、一九七九年五月

森慶三・市原硬・竹林宏共編『醫聖・華岡青洲』、昭和三十九年一〇月、

醫聖・華岡青洲先生顯彰會發行、一九六四年一〇月

宗田一『華岡青洲』、吳秀三『華岡青洲先生及其外科』復刻版附録、

同朋舎、一九七一年三月

上山英明『華岡青洲先生 その業績とひととなり』、一九九九年、醫

聖・華岡青洲顯彰會

松木明知『華岡青洲の新研修』、岩波出版サービスセンター、二〇〇

二年一〇月

【研究史の研究】

松木明知『華岡青洲研究史』、『日本醫史學雜誌』第五一卷第三號所收、

二〇〇五年九月、日本醫史學會

【書誌的研究】

松木明知『乳巖治驗錄』は青洲の自筆ではない、『日本醫事新報』

四〇三八號所收、二〇〇一年九月、日本醫事新報社

高橋均、坂田育弘、兒玉重隆「癸亥 春林軒續藥方冊(一)」、『日本

醫史學雜誌』第四七卷第二號所收、二〇〇二年八月、日本醫史學會

高橋均、坂田育弘、兒玉重隆「癸亥 春林軒續藥方冊(二)」、『日本

醫史學雜誌』第四七卷第四號所收、二〇〇二年十二月、日本醫史學

會

高橋均、坂田育弘、兒玉重隆「癸亥 春林軒續藥方冊(三)」、『日本醫史學雜誌』第四八卷第二號所收、二〇〇二年六月、日本醫史學會 第48卷第2號

高橋均、坂田育弘、兒玉重隆「癸亥 春林軒續藥方冊(四)」、『日本醫史學雜誌』第四九卷第二號所收、二〇〇三年六月、日本醫史學會【學術史的研究】

宗田一「洋學史から見た華岡青洲」、『洋學史學會研究年報・洋學(三)』所收、一九九五年一〇月、洋學史學會

【傳記考證研究】

松木明知「華岡青洲の系譜的研究—和歌山縣海南市の川端家、柳川家の調査から」、『日本醫史學雜誌』第四六卷第一號所收、二〇〇〇年三月、日本醫史學會

【麻醉學的研究】

宗田一「華岡青洲の麻醉藥開發・外來技術受容の日本化」、『實學史研究』第四卷所收、一九八七年二月、實學資料研究會編、思文閣發行

松木明知「華岡青洲と麻沸散・麻沸散をめぐる謎」、二〇〇六年八月、眞興交易・醫書出版部

【乳癰治療、および『乳癰治療録』に關する研究】

松木明知「華岡青洲の『乳癰治療録』の新研究(上)」、『麻醉』第四九卷第八號所收、二〇〇〇年八月、克誠堂出版

松木明知「華岡青洲の『乳癰治療録』の新研究(下)」、『麻醉』第四九卷第九號所收、二〇〇〇年九月、克誠堂出版

松木明知「青洲先生療乳癰圖記」について—華岡青洲と廣瀬屋利

兵衛の妻—(抄)」、『日本醫史學雜誌』第四九卷第一號所收、二〇〇三年三月、日本醫史學會

松木明知「華岡青洲の『乳癰姓名録』の研究・個別の症例記録との比較検討」、『日本醫史學雜誌』第四八卷第一號所收、二〇〇二年三月、日本醫史學會

松木明知「青洲先生療乳癰圖記」について—華岡青洲と廣瀬屋利兵衛の妻—(抄)」、『日本醫史學雜誌』第四九卷第一號所收、二〇〇三年三月、日本醫史學會

松木明知「華岡青洲と『乳癰治療録』」、二〇〇四年三月、岩波出版サービセンター制作、松木明知發行

【文獻譯注】

松村巧・高橋均「華岡青洲自筆『萬病一毒之說』考・現代語譯および注解」、『近畿大學醫誌』第二四卷第二號所收、一九九九年二月、近畿大學醫學部

高橋均「華岡青洲自筆萬病一毒之說」、『日本醫史學雜誌』第四五卷第二號所收、一九九九年六月、日本醫史學會

松村巧・高橋均「華岡青洲自筆『序』考・現代語譯および注解」、『近畿大學醫誌』第二四卷第二號所收、一九九九年二月、近畿大學醫學部

松村巧・高橋均「華岡青洲自筆『丸散便覽序』考・現代語譯および注解」、『近畿大學醫誌』第二五卷第二號所收、二〇〇〇年二月、近畿大學醫學部